夢を喰う

THE WRESTLER

1980年 激震のモスクワ五輪ボイコット
失意の中、自分を信じて戦い続けた富山は、四年後のロサンゼルス五輪で金メダリストとなる。
それから四十年――
夢を喰らった男の「目」は、いま何をみつめているのか。

1984年 ロサンゼルス五輪 レスリング 57kg 級 金メダリスト

富山英明

長編ドキュメンタリー作品

監督・撮影 藤森圭太郎

原案『夢を喰う』富山英明 著（1984年12月6日／郁朋社）

企画・プロデュース 西山理彦 藤森圭太郎 音楽 野瀬栄進
編集 西山理彦 サウンドエディター 小野幹和 撮影 らくだ
製作・制作 MUGENUP / Otter Pictures

勝負の厳しさと共に、異なる者を受け入れる彼の包容力のお陰で、
メダルも何も取ったことのない私も仲間に入れてもらった。
この映画は金メダリストのヒーロー物語ではなく、
彼の人間そのもの、生き様を描きだしている。

岡田武史

こんなにレスリングに愛された男はいない。
目標のために夢を追いかけ、努力と忍耐で夢を喰らってきた。
現役、指導者として現場主義を貫いた。
レスリング界、スポーツ界の夢をもう一度喰らってほしい。

瀬古利彦

私が19歳で世界女王となり、喜びから48時間も経たないうちに、
実の母親の死に直面し、夢実現から真っ逆さまに落ちた時。
寮から夜逃げ同然で逃げ出した。
その私を引き戻してくれたのが、この富山監督だった事を今納得した。

ダルビッシュ聖子

「一瞬」で決まる勝負の世界 ――――
一途に生き続けるレスラーの物語

レスリングは両肩が１秒でもマットにつくと試合が終わる
「一瞬」で全てが決まる勝負の世界である。

1984年、ロサンゼルス五輪で金メダリストになったレスラー富山英明は、
現役引退後、中学時代から書き溜めた日記をもとに自叙伝『夢を喰う』でその半生を綴った。
それは夢を叶えるまでの単なるサクセスストーリーではなく、
予期せぬ「まさか」に翻弄されながらも、夢を喰った人間の孤独な問いであった。

それから40年後の『夢を喰う』を描く本作は、2015年に製作が開始され、8年もの制作期間を経て完成した。

アスリートはある時に引退を迎えるが、富山がレスリングを見つめる「目」はずっと変わらない。
夢を喰らってしまい、生涯レスラーとして生きる宿命を背負っている目である。

富山は「一瞬」で全てが決まる勝負の世界に身を置きながら、一瞬で決まる「勝負」だけに捉われない。
“負けることを許されない宿命を背負った者の苦悩”と、“どんなに望んでも勝てない者の苦悩”を等価に理解する度量が、
時に鋭く時に優しい、喜怒哀楽に溢れた表情に表れている。
そんな富山の生き様見つめてゆくと、ある問いが浮かび上がってくる。

「人は人生に何を求め、何を遺そうとしているのか。」

普遍的ではあるが、一途に問い続けたその先に何がみえて来るのか。
まさに本作は、あれから40年後の孤独な問いを描いている。

富山英明　Hideaki Tomiyama

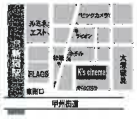
1957年 茨城県生まれ。中学時代にレスリングと出会い土浦日大高で本格的に始める。
大学進学後、1978年から全日本選手権を7連覇し、1978・79年の世界選手権を連覇。
1980年のモスクワ五輪は日本のボイコットにより幻の代表に終わったが、
4年後のロサンゼルス五輪ではフリースタイル 57kg級で宿願の金メダルを獲得する。
引退後、自叙伝『夢を喰う』を発表し、米アイオワ大学へコーチ留学。
帰国後は母校日本大学の教員としてレスリング部のコーチ・監督を務める一方、
五輪代表コーチ、アテネ五輪・北京五輪の代表監督として日本のメダル獲得に貢献。
2008年 国際レスリング連盟殿堂入りを果たす。
2021年 10月、福田富昭前会長の後を受けて日本レスリング協会の会長に就任。（公開時資料より）

7/6(土)～7/19(金) 都内独占公開!!

7/6-12 連日 12:00　7/13-19 連日 10:00

特別鑑賞券発売中！ 1,400円(税込) ※当日一般 1,800円の処

新宿駅東南口階段下ル 甲州街道沿ドコモショップ左入ル
新宿 K's cinema
03（3352）2471 www.ks-cinema.com
各回入替・全席指定席



映画「夢を喰う THE WRESTLER」
公式Ｘ(旧ツイッター)アカウント
https://twitter.com/yumewokurau
公式ホームページ
https://www.yumewokurau.com